様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月　 ３ 日現在

機関番号：２４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２０２５

研究課題名（和文）遺跡・遺構からみるアナトリア都市文化の通時的分析

研究課題名（英文）A diachronic study of urban cultures in Anatolia by focusing on the ruins and monuments

研究代表者
阿部　拓児（Abe, Takuji）

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：９０６３１４４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、トルコ・アナトリアの「重層的な歴史」／「歴史的重層性」を明らかにするために、3年間の研究期間中、毎年夏に現地調査を実施した。調査地としては、2017年にアナトリア南西岸（カリア地区）およびエフェソス近郊、2018年にアナトリア南西岸（リュキア地区・カリア地区）、2019年にアナトリア西内陸部（ウシャク県、デニズリ県）およびイズミル県を対象とした。以上の調査結果を踏まえ、2019年10月には『トルコ・アナトリアの「歴史的重層性」と文化遺産』（京都府立大学文化遺産学叢書第17集）を刊行した。本報告書によって、アナトリアの「重層的な歴史」／「歴史的重層性」の具体的な断面が描き出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アナトリア半島は大きく4時代の変遷（古典古代＝「異教」時代／中世ビザンツ＝キリスト教時代／セルジューク・オスマン＝イスラーム時代／世俗国家トルコ共和国時代）を経験してきた。しかし、これらは既存の社会・文化の断絶ではなく、前時代の遺産の変質および再解釈による連続性として理解されるべきである。そこで本研究は、考古遺物、建築遺構、都市遺跡などのマテリアルな側面から、アナトリア都市文化がたどってきた「重層的な歴史」を描き出した。これにより本研究は、トルコ共和国が国内の文化遺産（とりわけ中世以前のそれ）をどのように解釈し、どのように提示しているのかという、新たな課題へ発展していくこととなった。

研究成果の概要（英文）：In order to pursue the true state of ‘multi-layered history’ / ‘multi-layers of history’ in Anatolia-Turkey, our research group made annual summer excursions and regular meetings during these designated years. We visited the south-western coast area (the Carian region), Selcuk and its environs in 2017; the Lycian and Carian regions (south-western Anatolia) in 2018; western inland Anatolia (Usak and Denizli provinces) and Izmir province in 2019. The results of these excursions are published as a research report, ‘The “multi-layers of history” and cultural heritages in Anatolia-Turkey (Cultural Heritage Studies Series of Kyoto Pref. Univ. no. 17),’ printed in October, 2019. Every chapter in this academic report sheds light on aspects of the characteristics of Anatolian ‘multi-layered history’ / ‘multi-layers of history’.

研究分野：西洋古代史

キーワード：アナトリア　トルコ　ヘリテージ　都市文化　物質文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

アジア大陸の西端に突き出たアナトリア（小アジア）半島は、古来よりさまざまな民族が行き交う地であった。アナトリアの歴史を、エーゲ海沿岸にギリシア人らが植民都市を築いた時代から叙述し始めても、同地は大きく 3 度の文化的な転換によって区切られた、4 時代の変遷を経験した。すなわち、ペルシア帝国・ヘレニズム諸王国・ローマ帝国と、統治国家を変えつつも、ギリシア語をドミナントな使用言語とし、八百万の神々の信仰にたいして寛容であった古典古代の時代。この伝統的な多神教社会を「異教」として否定することによって成立してきたキリスト教世界の一翼、中世ビザンツ帝国の時代。後発ながら、既存のキリスト教社会をコントロールしつつ、イスラーム世界の雄として君臨するセルジュークおよびオスマン帝国の時代。そして、いったんは宗教を国家から峻別し、世俗化＝政教分離を目指しながらも、新たなナショナル・アイデンティティを模索し続けているトルコ共和国の時代である。

しかし、上述のような転換を経るたびに、既存の文化や伝統が完全に消去されてきたわけではない。むしろ、後から成立した社会は前時代の文化や伝統をしたたかに内に取り込み、またそうすることによって、前時代のそれもしぶとく生き残っていった。たとえば、ビザンツ的キリスト教において、古代的な多神教は完全には葬り去られたわけではなく、多種多様な聖人たちへの崇敬としてしぶとく生き残ったと指摘されている。偶像崇拝の禁止についても、聖書の教え通りには実行できず、長年の論争の結果、イコン崇敬の容認に落ち着いたことは、あらためて述べるまでもなかろう。また、今日のトルコを訪れると、各地のモスク（ジャーミー）が没個性的なまでに、コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂に似ていることには、誰しもが気づかされるであろう。これは、オスマン建築の様式がビザンツ聖堂建築の最高傑作の模倣および超克の過程で完成されていったことの証しである。現代のトルコにおいては、さらに奇妙な現象が起きている。後からアナトリアを支配したトルコ系ムスリムにしてみれば、それ以前の古代や中世の文化が自らの歴史と断絶していることは、自他ともが認める自明の事実である。しかしながら、世俗主義化のなかでイスラームのみにアイデンティティの拠り所を求める必要のなくなった彼らは、イスラーム化・トルコ化以前の歴史をローカルの文化遺産として再評価してきたのである。

このようにわずかな例を挙げただけでも、上述の 3 度の大転換とはすなわち、既存の社会・文化の「リセット」を意味していたわけではなく、むしろ、それらが残した遺産を本来の文脈からはぎ取り、変節させることによって、自らの歴史の内にしたたかに取り込んでいった過程であると理解するほうが、実情に適っていることは明らかである。そこで、このようなアナトリアがたどってきた変節の歴史を、ある一つの流れるストーリーとして総合的に描き出すことが、求められていたのである。

２．研究の目的

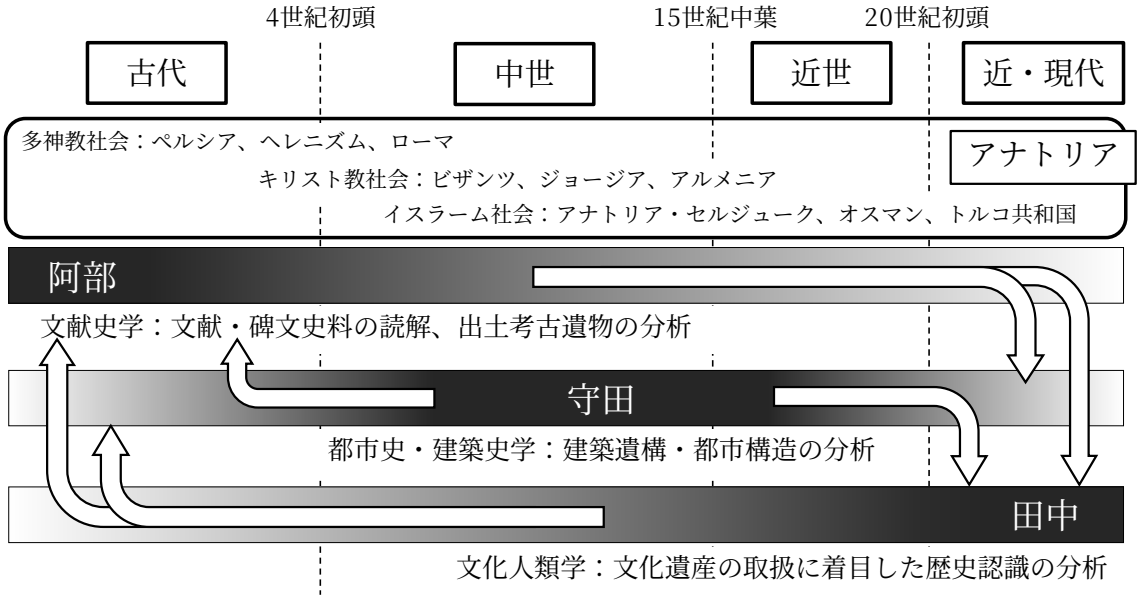
上述のごとく、アナトリア（小アジア）半島は大きく 3 度の文化的な転換によって区切られた、4 時代の変遷（古典古代＝「異教」時代／中世ビザンツ＝キリスト教時代／セルジューク・オスマン＝イスラーム時代／世俗国家トルコ共和国時代）を経験してきた。しかし、これらは既存の社会・文化の断絶ではなく、前時代の遺産の変質および再解釈による連続性として理解されるべきである。そこで本研究では、考古遺物、建築遺構、都市遺跡などのマテリアルな側面から、上記のアナトリア都市文化がたどってきた変節の歴史を、一つのストーリーとして描き出すことを目的とした。

そのさい、本研究はこれをただ単に歴史認識といった形而上の問題に押し込めるのではなく、考古遺物、建築遺構、都市遺跡など、とりわけマテリアルな側面に着目することにより、実践のレベルにおいて、この変節が日々いかに繰り返し――ときには無意識のうちに――体験されてきたかを明らかにする。本研究は最終的にアナトリア都市文化の特殊的重層性（および一定の普遍性）を通時的に浮かび上がらせることを目指した。

３．研究の方法

本研究の目的はアナトリア都市文化の変節の歴史を、ある一つの流れるストーリーとして総合的に描き出すことにあった。この課題は 3 人の研究者による相互補完的な分担によって進められた。3 人の研究者の分担は、以下の通りである。すなわち、阿部（研究代表者）が、古典古代からキリスト教化までの時代を、主に文字史料（文献・碑文史料）の読解と、出土考古遺物の分析から描き出す。続いて、守田（研究分担者）は、ビザンツ時代からイスラーム・オスマン帝

国への移り変わりを都市史・建築史学的な視点から読み解く。最後に田中（研究分担者）は、現代トルコにおける文化遺産の取り扱いの問題に着目することにより、共和国時代のトルコにおいてイスラーム以前の歴史がどのように「領有（アプロプリアシオン）」されたかを、文化人類学的な手法から議論する。本研究の最大の特徴は、この相互補完性にあったと言える（下図を参照）。



４．研究成果

本研究では、3 年間の研究期間中、毎年夏に現地調査を実施し、またその前後には計 4 回の国内研究会を開催した。現地調査の対象地は以下のとおりである。

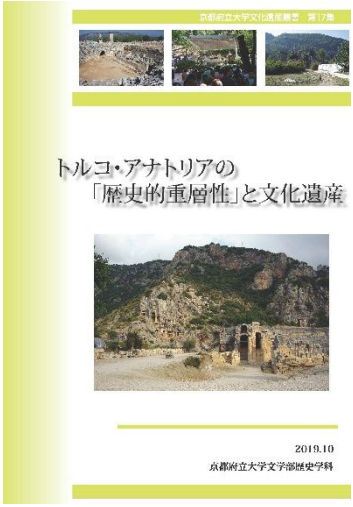
2017 年　ラブラウンダ遺跡、アリンダ遺跡、ベチン城塞、ストラトニケイア遺跡、イアソス遺跡、ボドルム市街・ボドルム城、アヤ・スルク～聖ヨハネ大聖堂、城塞～、セルチュク考古学博物館、エフェソス遺跡（セヴン・スリーパーズの洞窟を含む）、シリンジェ村、メリエム・アナ・エヴィ（聖母被昇天祭）、セルチュク・エフェソス都市博物館、プリエネ遺跡、ミレトス遺跡、ディデュマ遺跡、チャムルク鉄道博物館、エフェソスのアルテミス神殿、セルチュク市内エクスカーション　～イサ・ベイ・ジャミィ、その他小規模モスク、墓廟、駅舎～

2018 年　ミュラ遺跡（デムレ）、アンドリアケ遺跡、デムレ周辺中世教会遺構群～ムスカル（ベリョレン）、カラベル（シオン）、アラキリセ～、キュアネアイ遺跡、シメナ遺跡、デレアウズ教会遺構、エルマル考古学博物館、アブダル・ムサ・トゥルベ、トロス遺跡、パターラ遺跡、クサントス遺跡、レトオン（レトゥーン）遺跡、カヤキョイ村、ピナラ遺跡、カウノス遺跡、ムーラ考古学博物館、ストラトニケイア遺跡、ラギナ遺跡、エウロモス遺跡、イキズ・トゥルベ、ミラス市街

2019 年　メンテシェ・ババ・トゥルベ、ムラディン・トゥルベ、ウル・ジャミィ（サンドゥクル）、アフヨンカラヒサル市内エクスカーション～ウル・ジャミィ、その他小規模モスク～、アイザノイ遺跡、キュタフヤ市内エクスカーション、クルシェイ・ババ・トゥルベ、ハジム・スルタン・トュルベ、ウシャク考古学博物館、ビン・テペ古墳群、サルデイス遺跡、テオス遺跡、メリエム・アナ・エヴィ、メトロポリス遺跡、ビルギ、ティレ市内エクスカーション、ラトモス山麓のヘラクレイア遺跡、ニュサ遺跡、アフロディシアス遺跡、ラオディケイア遺跡、ヒエラポリス遺跡

以上の調査結果を踏まえ、2019 年 10 月には『トルコ・アナトリアの「歴史的重層性」と文化遺産』（京都府立大学文化遺産学叢書第 17 集、全 10 章、総頁数 152、ISSN 1883-728X）を刊行した。本報告書の内容は以下のとおりである。

1. メリエム・アナ・エヴィの「再発見」とエフェソスのマリア伝承にかんする予備的考察（阿部）
2. 現代セルチュクにおけるエフェソスの位置づけ（田中）
3. アリンダ遺跡と「カリアの王女」（阿部）
4. ウズン・ユヴァの「ヘカトムノス廟」
   —発見、整備とその真正性—（阿部）
5. ベチン城塞の建築遺構の調査報告（守田）
6. ストラトニケイアの古代（阿部）
7. クサントスの王墓—チャールズ・フェローズの記録と現状—（阿部）
8. パターラ遺跡とゲレミシュ村の人々（田中）
9. ディルゲンレル村近郊のデレアウズに残る中世ビザンツ教会堂の調査報告（守田）
10. デムレ近郊に残るビザンツ教会堂遺構（守田）



本報告書によって、アナトリアの「重層的な歴史」／「歴史的重層性」の具体的な断面が描き出された。今後はこれらの各断面図を縫いあわせていくことが重要となると同時に、新たな疑問も浮き上がった。すなわち、今この「歴史的重層性」に着目するならば、トルコ共和国にとって中世以前に起源をもつ文化遺産（たとえば古典古代の神殿やキリスト教の教会堂）は、けっして断絶したる他者の帰属物ではなく、みずからの文化の構成要素ともなりえる。このようなねじれ現象こそが、トルコ共和国における文化遺産をめぐる問題を複雑に、——しかし、それだけに意義深く——しているのである。では一体、それにともなう再利用・再解釈には基準や法則性が存在するのであろうか。あるいは、そこに何らかの見えざる意図を読み取ることができるのだろうか。本研究グループは、今回の研究期間を終えるにあたって、トルコ共和国内の文化遺産がどのように解釈され、どのように提示されているかを分析することによって、アナトリアの「歴史的重層性」の現在地を見定めることを新たな研究課題として見出したのであった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 守田　正志	４．巻 －
２．論文標題 トルコ共和国ディルゲンレル（Dirgenler）村近郊のデレアウズ　（Dereagzi）に残る中世ビザンツ教会堂の調査報告	５．発行年 2019年
３．雑誌名 2018年度日本建築学会 関東支部研究報告集Ⅱ	６．最初と最後の頁 435-438
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 阿部　拓児	４．巻 3
２．論文標題 ウズン・ユヴァの「ヘカトムノス廟」―発見、整備、その真正性	５．発行年 2019年
３．雑誌名 フェネストラ（京大西洋史学報）	６．最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田中　英資
２．発表標題 誰の遺産か？：トルコ国民意識の構築と古代アナトリア諸文明
３．学会等名 金沢大学主催公開国際シンポジウム『越境する文化遺産：解釈の対立を超えて、未来を育もう』（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 松原　康介	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 400
３．書名 地中海を旅する62章	

１．著者名 小笠原 弘幸	４．発行年 2019年
２．出版社 九州大学出版会	５．総ページ数 324
３．書名 トルコ共和国 国民の創成とその変容	

１．著者名 阿部　拓児、田中　英資、守田　正志	４．発行年 2019年
２．出版社 京都府立大学文学部歴史学科	５．総ページ数 152
３．書名 トルコ・アナトリアの「歴史的重層性」と文化遺産（文化遺産叢書第17集）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田中　英資 (Tanaka Eisuke) (00610073)	福岡女学院大学・人文学部・准教授 (37118)	
研究分担者	守田　正志 (Morita Masashi) (90532820)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授 (12701)	